

ミコイ「・・そういうえば、ちょうど一年前の今日、かな、この街に上京してきた日は。上京した絶対的な理由なんかなくて、ただ学校卒業して地元にいっぱなしだとその先一生外に出なそうな漠然とした不安があつて・・。だから明確な夢を抱いてやつてきたとかそんな大それたあれじやないんだけど、とにかく入所金さえ取めれば100パー受かると言われた専門学校に通うことになった」

カオリ「どうしたの？大丈夫？」

ミコイ「そう声をかけてくれたのは、この先唯一の親友となるカオリだった。右も左もわからず専門学校の正門前でほぼパンツ丸出し状態でうずくまつてた私は声をかけてくれたのが始まりだった。目立ちがり屋の父と、引っ込み思案の母から生まれた私は、「目立ちたがりだけ引つ込み思案」というめんどくさい性格で、だから、いざ入学式とか何かきばらなきやいけない節目には必ずと言っていいほど胃を痛めてうずくまつた。そんな私の性格と、カオリは真逆で

カオリ「ああああああ、もうう、またイヤホンの紐、絡まつてこま結びになつ
ちゃつたよおおおおおお」

ミコイ「とか」

カオリ「ああああああ、（アドリブでなんか面白いこと）」

ミコイ「とか何かにつけて感情を表に出すわかりやすいタイプだつた。それ以
降、凸凹コンビとクラスでは言われ、カオリが太陽だとしたら私はそのあかりで
照られされる月。だから居心地がよかつた。何でも話せた。大好きだつた。だけ
ど、たつたひとつだけカオリに嘘をついた・・。それはカオリに初めて真顔で相
談された時だ・・。」

カオリ「ねえ、ミコイって、好きな人とかいるの？」

ミコイ「え？ なんで聞くのそんなこと？ そういうカオリはどうなの？」

ミコイ「(独白) と質問に質問で返す、会話で一番やつちやけない私の回答に、

カオリは嫌な顔一つせず」

カオリ「私、好きな人できたかも!」

ミコイ「とむしろ聞いてほしそうなフラグを立てていた。恋愛話は正直苦手だった。基本昔から受け身で、自分から告白したこともないし、告白されてもどう返事しかわからず、結果的に放置という状態で相手が痺れを切らす、というパターンだった。だから私の恋愛話には面白みがなかつた。」

カオリ「ミコイ、これ絶対しゃべんないでよ! 絶対誰にもしゃべんないでよ!」

ミコイ「大丈夫だよ」

カオリ「もししゃべったら安全ピンで口閉じるよ」

ミコイ「全然安全じゃないピンだよ、それ! 言わないって。だいたいカオリ以外喋る人いないし」

カオリ「(耳元でこそこそ)」

ミコイ「え、何? くすぐったさだけしかないんだけど、もうちょっとちゃんとしやべつてよ」

カオリ 「(耳元でもぞもぞくちよくちょ)」

ミコイ 「くすぐつたって！ちゃんと言つてよ」

カオリ 「(■■くんという名前を言う)

ミコイ 「え、 ■■くん！？」

カオリ 「声でつか！し！し！」

ミコイ 「ど、どこが好きなの？」

カオリ 「いや、どこつて言われてるとあれだけど、正直、最初とか全然好きとか
じゃなかつたし。むしろ、なんかチヤラそうだから苦手なタイプだなあつて思つ
てたんだけどね。こないだの月曜、夕方急にどしゃぶりになつたじyan。その時
まだ学校にいたのね、傘ないし、どうやつて帰ろうと思つてた時にたまたま■■
くんから連絡きたから、今から傘持つてきてよつて冗談半分に言つたの。そしたら
本当に傘もつてきてさ。の人、めちやくちや家遠いんだよ、そつからわざわ
ざきてくれて。とかそういうのがあれこれがあつて」

ミコイ 「(独白) カオリが好きになつたという■■つて男子は、私と同じ地元で
一緒に上京してきた仲間だった。高校ではそれほどしゃべらなかつたけど、進路

の話題が出始めた三年の冬。クラスのみんな ほとんどが地元で就職という選

択肢を選ぶ中、私だけ上京希望かと思いきや、■■くんもそうで、だからそれ以

降、やけに親近感が湧いて話すようになつたっていうか。【都会に住むならどこ
のエリアがいいのか】、【どこの専門学校がいいのか】とかあれこれ教えてくれ
て、この学校を進めてくれたのも実は■■くんだった。

カオリ「■■くんっとき、誰かと付き合つてるとと思う？」

ミコイ「さあ・・たぶんいないんじゃない？」

カオリ「ほんと！？じや応援してくれる？」

ミコイ「そりやするでしょ。全力で応援するよ！」

ミコイ「（独白）・・なんて思わず言っちゃいましたけど、正直な話、カオリから、

■■君のこと好きだつて聞いた時、なんだか嫉妬心が湧いて、で、お恥ずかしい
話、その時ね、その時初めて、あー、そうか、私って■■のこと好きになつてた
んだつて気がついたんだ・・」

カオリ「けど、ライバル多いから参っちゃうよね。」

ミコイ「ライバルって、恋敵ってこと」

カオリ「そう、だって■■くんってさ誰にでも優しいからさ、絶対勘違いしちゃ

う女子いるそだもん。でしょ？ミコイくんはそう思わんかね？」

ミコイ「（独白）確かにそうかもね・・。（独白）なんて笑ってごまかしたけど、私もその中の一人だったんだ。確かに昔から優しいんだよな。

カオリ「とか言つても始まらないからね。あたつて碎けるよ！フォロー頼んだ！」

ミコイ「（独白）さあ、そつからのカオリのフラグの立て方がすごかつた」

カオリ「ね、駅前に今度パスタ屋できた知ってる？行つてみたんだよねえ」

ミコイ「とか」

カオリ「■■くんつてカラオケとかでどんな曲歌うの？え、ほんとに？聞いてみたい！」

ミコイ「などと怒涛に続くアピールを遠目から見守っていた。恋をしたら綺麗になるって言うけど、あれ本当なのかな。私はそういう感覚はわからないんだけど、確かにカオリはエネルギーがすごかつた。もともと強いパワーの持ち主なのに、なんかもう、毛穴から変な、もわーんとしたもん出まくってた。だけどそんなエネルギーが数日後、凍りついたようになるなんて思つてもみなかつた」

カオリ「（暗い表情）え、なんで言つてくれなかつたの？・

ミコイ「・・何の話？」

カオリ「何の話じゃなくて、ミコイって■■くんから告白されたんでしょ？」

ミコイ「あ・・えっと」

カオリ「嘘つかなくていいよ、本人がそう言つてたんだから。え？なんで教えてくれなかつたの？応援するつて言つてくれたのに。バカみたいじやん。ピエロじやん。言つてよ先に！」

ミコイ「（独白）カオリが怒るのも無理ないよね、ごめん、でも言えなかつたんだよ。■■のことも好きだけど、同じくらいにカオリのことは好きだつたから

「ごめん、・・なんか一人でお祭りみたいに騒いで・・・馬鹿みたいだよね・・・

「ごめんほんと・・ごめん本当、しかでてこないや・・・」

ミコイ「その言葉を最後に、カオリから連絡はなかつた。学校でも見かけなくなつていた。完全に嫌われた、と思つた。何度か連絡を取ろうと思つたけど、何をどう切り出していいかがわからなくて、結局、電話を持ったところで終わる。そんな繰り返しの日々が続いた。それからさらに数日後、カオリの番号から着信があつた。電話を取ると、聞こえる声はカオリじやなく、カオリのお母さんで、カオリが入院してると教えてくれた。学校の帰り道、大通りでトラックにはねられた。私は瞬間に一番最悪の状況が脳裏によぎつて、教えてもらった病院の場所に駆けつけた」

ミコイ「(探してゐる様子) か、カオリ! カオリー!」

カオリ「(寝てゐるようで目を開ける) ・・え、なんで來たの?」

ミコイ「何でつて言われても。カオリんとこのお母さんから連絡もらつて、この

病院に入院してるので

カオリ「いや大げさだよ。トラックに跳ねられて、10メートル飛んだだけだよ」

ミコイ「10メートルも飛んで生きてたんだ！？」

カオリ「平気だって、両足複雑骨折した以外は。」

ミコイ「両足複雑骨折した時点で平気じゃないよ、ちつとも。ちゃんと教えてよ、

そういうこと」

カオリ「…教えて…か。ちゃんと教えてくれない人に？」

ミコイ「(急にテンション下がり)…そうだよね、ごめんね…。」

カオリ「なんてね、おあいこってことにしよかな」

ミコイ「え…」

カオリ「ほんとは知ってたんだ。■■くんがミコイの事すきだったの…」

ミコイ「…」

カオリ「だからミコイに聞いたんだよ、好きな人いる？って。確認したくて。け

ど応援するって言ってくれたからさ。じゃ大丈夫なのかなって思つて。ガンガン

アピールしたけど、やっぱそこに割つて入ろうとしてたからバチがあたつたの

かな」

ミコイ 「告白はされたけど、別に付き合つてないよ」

カオリ 「え・・なんで？ミコイも■■君のこと好きなんじやないの？」

ミコイ 「・・好きかもだけど・・付き合わなくていい」

カオリ 「え・・バカなの？」

ミコイ 「バカかな・・」

カオリ 「クソバカだよ、なんで付き合わないの！？」

ミコイ 「なんかライバル多そうだし。何考てるかわからんないし」

カオリ 「いや、そんな理由で」

ミコイ 「それよりね、こうやつてカオリともう一回しゃべれる方が嬉しい

カオリ 「遠慮しなくていいよ、もうお互いぶつちやけたんだしさ、ちゃんと勝負

しよ。正々堂々と」

ミコイ 「え、それ恋敵みたいになるつてこと？」

カオリ 「そうだよ、改めてよろしくまして！」

ミコイ 「うう、またお腹痛くなつてきた・・」